

私は中学一年生の時に、職場体験の授業の一環として父の職場を訪問しました。そこで障がいを持っている人と触れ合う機会がありました。父の職業は作業療法士で、主に高齢者の方や障がいを持っている人へのリハビリテーションを行っています。作業療法士は、人々が生きて行く上で行う活動の全てである「作業」を通じて、その人らしい生活のために寄り添い、支援しています。父は一人一人の生活の動きを把握して、その人のできる動きを見極めて関わっていました。例えば、お風呂に入る動作ができるようになるために、浴槽をまたぐ動作の練習や、手すりなどの福祉用具を使って、お風呂に安全に入る方法を考えていきました。また父は、コミュニケーションを通して、利用者さんが困っていること、できるようになりたいことなどを把握していました。私は、その人の思いに寄り添うことが大事だということ、見学を通して学びました。

私は、「障がい」という言葉を耳にした時、マイナスイメージを持ってしまふことがあります。しかし、その考えは障がいを持っている人を差別していると、捉えることもできません。障がいを持っている人も、なろうと思ってなったわけではないし、私たち健常者と同じ人間です。父の仕事ぶりを見て、私は、健常者と障がいを持っている人が、どのように共生していけば良いのかを考えたと思うようになりました。

私も、小学生の時に足を骨折しました。骨折も、足を自由に動かせないという一つの障がいです。骨折をすると、移動手段として松葉杖を使います。家では平気で使えるけど、学校で松葉杖を使うとなると、どうしても周りの視線や反応を気にしてしまいます。また、健常者と骨折している自分を比べてしまって、松葉杖を使っている自分を、恥ずかしく感じ

ました。それは、私が障がいを持っている人に対して、マイナスイメージを持っているからだと思います。でも、骨折して松葉杖を使っている自分に対して、からかう人は周りにおらず、かえって困っている私の手助けになってくれました。また、学校にエレベーターやスロープが設置されていて、スムーズな移動が可能だったことで、毎日がとても過ごしやすくなりました。実際に障がいを持っている人の立場になってみて、障がいを持っている人にとって、周りの人の手助けはとても嬉しいし、助かることだと感じました。また、健常者と障がいを持っている人との支え合いが大切だということに気づかされました。

令和四年度の厚生労働省の調べでは、障がいを持っている人の総数は九六四・七万人で、日本の人口の約七・六パーセントを占めています。けれども、障がいを持っている人と健常者では、健常者が多数を占めているので、健常者に合わせた社会が、つくられてしまっています。つまり、少数派である障がいを持っている人にとっては、生きづらい環境になっているということです。そこで重要になるのは、障がいを持っている人について理解した上で、障がいを持っている人の立場になって考え、行動を起こすことだと思えます。

「ノーマライゼーション」や「バリアフリー」という言葉があります。「ノーマライゼーション」は、年齢や障がいの有無に関わらず、みんなが普通の生活を送ることができるようになる考へのことです。そして「バリアフリー」は、バリア(障害)を取り除き、障がいを持っている人の生活行為をしやすい環境に整えることです。

環境を整えるのは、ゆっくりとですが進んでいます。すぐに変えることができるのは、心の持ち方です。健常者と障がいを持っている人が共通の認識を持ち、心の輪を広げることで、家庭や社会で生き活きと暮らすことができるのではないのでしょうか。まず、心のバリアフリーから実践していきたいと思えます。